
Re : mind

リスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Re：mind

【コード】

N3930Q

【作者名】

リスト

【あらすじ】

『忘れる』

それが人にとって一番怖い。

僕は普通の家に住んでいると思っていた。

朝は父が一番に家を出て、次いで姉、最後に僕。

そしてそれぞれがそれぞれの業務を終え、家に帰宅し、食卓を囲む。就寝までは家族とテレビを見たり、姉とゲームしてみたり、お父さんと分らない将棋を試してみたり、お母さんと食器を洗ったり。隣の家も同じで、その隣の家もまた同じだと思っていた。

実際今でも変わらない。

ここは僕のふるさとで、はじまりの場所であるのには違いない。

唯一変わった点があるとすれば、僕が死んだことくらいだ。

今こうして未練がましく宙を漂っているのも、悪霊になったり守護霊になったりしたわけでもない。

ただただ家族に会いたかっただけ。

愛があっただけ。

姉はまだ泣いていた。

部屋の明かりをつけず、身体は黒く覆われている。

喪服というやつなのだろう。

幸い僕はまだ着たことがなかった。

部屋は小らまで同じだったが、中学にあがる姉が自分の部屋が欲しいと言い出し、父の部屋を譲ってもらった。

そして僕は姉と共同していた部屋を使い始めた。

どう考えても部屋はこちらの方が広かったのだが、

『私、せまいところの方が好きだから。』

と姉は謙遜していた。

こうして窓の外から客観視してみると、さらに部屋は狭く思えた。

その中にいる姉は、僕よりも薄かった。

お母さんはリビングにいた。

明かりはついていたが、姉と同様、黒服に身を包んでいた。食器をいつもと変わらない手つきで洗っている。

ときばきとしているできる女、そんな印象だ。

お父さんは本当にいい嫁を貰い受けたものだ、と高校生の僕でも感心するほどの専業主婦だった。

台所に張った水にお母さんの顔が映った。

蛇口から水滴がぼたぼたと落ちている。

水面は揺らぎ、表情が掴めない。

が、もう一つの水滴が波紋を呼んだところで僕はその場を去った。

お父さんは、僕のふるさとはいなかった。

少し探しに出かけよう、と思った矢先に、家の側にある犬小屋が目に入った。

そこにいたのは、去年死んだ犬だった。

相も変わらず寝ている。

そうか、お前もずっとここで僕たちと暮らしたかったのか。と、心でしんみり思った。

自然と顔が緩くなる。

自分と同じ存在がいたことに対する安堵感なのだろうか。

少しだけ天を仰ぎ、もう一度小屋を見ると、そこにはもう何もなかった。

安堵したのは僕だけじゃない、そう思った。

お父さんを見つけた。

暗闇の中、見つけられたのは奇跡だった。

家から一番近い神社に向けてゆっくりと歩いていた。

ここは初詣なんかによく来る。

去年は合格祈願なんかもやりに姉と来た。

すこぶる成績の悪かった僕は自分も驚くほど合格を願った。

あのときの僕はどうしてああも必死だったのだろう。

走馬灯、という題名タイトルの思い出を旅していると、お父さんが賽銭箱の前で止まった。

『俺はこういう類をあまり信じない性質たちでね。たぶん息子もそうだろう。』

そこまで言って財布を取り出した。

そのまま財布ごとお賽銭箱にすつと入れた。

『だから、神様。頼む。俺の子を返してくれ。』

両手を合わせ、その場に座り込む。

お父さんが泣くなんて似合わない、と口に出して言った。

そして渴いた涙が、頬を伝った。

僕は普通の家庭に生まれた普通の子供だ。

何も特別ではない。

ただ、他人と変わったところがあるとするならば、それは死を知っているところだ。

享年15歳。

僕が自慢できる肩書きだ。

天国では役にたちそうもないな、なんて思いながら、ふるさとを去ろうとする。

人生。

楽しかった。

そう言い切れる。

それでも世界は廻る。

僕を忘れて。

でも、僕は忘れない。

決して。

人は忘れられることに怯える生き物だから。

僕のこと、人生であと一回、思い出してください。

(後書き)

思い出してくれる人が、あなたの側にいますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3930q/>

Re : mind

2011年1月28日11時59分発行